

# 妄点(試し読み)

大文妄



目次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| さよなら 井上大和             | 5  |
| マイ・リトル・ミステリアス えむばーど   | 7  |
| 異世界に行く方法 菱野隆弘         | 11 |
| フィリオトウーラ ペたへるつ        | 15 |
| フレーム・イズ・デッド 菱野隆弘      | 19 |
| 五日目の文芸部（試し読み版） やおいやおい | 23 |
| ナマエとカラダ フミコフミオ        | 25 |



さよなら

井上大和

## 序

夢。夢。夢。頭の中に、僅かに残っているリズムが何  
度も、何度も響く。誰の言葉だったっけ。そんな事はも  
うあまり関係がない。僕にも夢があった。忘れてしまっ  
た夢があった。心に灯っていたはずの情熱の炎は、音も  
立てずに消えて、今ここには汚い色をしたすすだけが残っ  
ている。不思議と、不快感はなく、むしろ灯りが消えた  
ことで、精神が限りなく透明に近づいているような感覚  
に包まれる。星が綺麗に見える夜。大切な友人と、流星  
を見に行った日を思い出した。

大切、な、友人。もう連絡も取っていないような関係  
で、よくもそんな白々しいことが言えたものだ。友人だっ  
た人がいなくなつたのは、今年だっけ、去年だっけ。そ  
れも思い出せない。思い出そうと思考するための体力が、  
もう残っていない。どうだっけいい。このお話には、時  
系列を説明するような内容もないのだから。

## 一

まずはひとつのエピソードを紹介しよう。これは数年  
前の話。

僕には仲の良い、と言うほどかどうか定かではないが、  
時々会話するくらいのサークルの先輩がいた。彼は精神  
が不安定で、同じく精神が不安定な僕とは、少し気が合  
う関係だったというわけだ。それだけ。彼は小説を書く  
人だった。どんな小説だったかと思ひ出そうとして、ひ  
とつも彼の作品など読んでいないことに気付く。その程  
度の関係だったが、彼が自殺未遂を起こした時には僕が  
一番に駆けつけたし、その時の部屋の塩素の匂いはよく  
覚えている。トイレの隅で嗚咽を漏らす先輩の姿は、ひ  
どく惨めだった。

(続く)

マイ・リトル・ミステリアス

えむぼーど

「ミステリアスき、つていうのは、人生で最も重要な素だと思ふんだよ。そもそも、男女が好き合つて付き合つていうのは、相手のことをもつと知りたいつて思うからじゃん？ だから、お前もさ、もつと慎み深くおしとやかに、ミステリアスに生きないと、彼氏なんてできねーぞ」

僕に背を向けて本を読んでいた妹が、静かに向き直つて言い放つた。

「キモい童貞」

「なにそれ流石にちよつと酷くない？ お兄ちゃんはそんな妹に育てた覚えはありません！」「育てられた覚えだつてない」「こつちだつてないわ！」「意味分からん」「そうその意味わからなさつていうのが必要なんだよ！」

「じゃあ兄貴モテるの？」「……」

妹はプツと笑つて本に向き直る。生まれてこの方一緒に暮らしている妹なんかにミステリアスつていうのを求めた僕が馬鹿だった。僕はミステリアスを求めて外へ出た。

はたして、ミステリアスガールはそこにいた。駅前の本屋でヘッドフォンを耳に付けて、官能小説コーナーにいた。すらり背が高く目を引く彼女は、人妻ものを真剣な顔で吟味して、一冊掴んでレジに行く。その翌日には、ハードSF棚の前。その翌日は、仏閣の専門書を選んでいた。毎日のように本屋に現れる彼女は、見かけるたびに違うコーナーにあつた。

「ちよつとまつて、それは買っちゃいけない！」「えつ？」

ある日僕は彼女の手を掴んでいた。店内の客が僕たちの方を見る。「えつちよつと痴漢？」「痴話喧嘩？」ひそひそと囁かれるなか、彼女は冷静に「離してください通報しますよ」だなんていうものだから、僕はいよいよ立場が悪くなる。

「ごめんそういうつもりじゃなかった」「じゃあどういうつもり？」「その本が」「この本が？」「買つちやいけないよそんな本は！」「はあ？」

彼女が手に持っているのは濁暑院溜水の名前が書かれたごんぶとの本。しかもハードカバー。

「どうでも良いけれど、この本で殴つたら人殺せると思



う？」

彼女の目は、本気だった。

(続く)



# 異世界に行く方法

菱野隆弘

僕の通う高校の文芸部には部員が二人しかいない。先輩と僕。想像される甘ったるい関係は僕と先輩の間には成立しない。どちらも男だからというのも理由の一つだが互いに小説にしか興味がないことも大きいのではないかと思う。

放課後になり授業のときと同じように自席に座って鞆から取り出した本を開き短編を一つ読む。それが僕の日課であり部活に行くための儀式のようなものでもあった。一日一本消費されている短編は積み重なっていつの間にか自宅の本棚を埋め尽くしつつある。實際家が潰れるだろうと親には怒られるがそれ以上に作者から恨みをかけて死んだとき蜘蛛の糸を切られそうなので僕には本を捨てるができない。

本を鞆にしまい席を立つと今まで気が付かなかつた光線が席の上に乗る。もう戻ってくるなという太陽からの宣戦布告かもしれない。

学内外問わず聞こえる野球部サッカー部その他青春している彼らの声は僕にはトラックを後ろに下げるときの『オーライ、オーライ』としか認識できないがフライでも

取っていて案外その通りのことを話しているのかもしれない。どうでもいいので早速部室へ向かう。

廊下を歩きながら教室から文芸部の部室までの遠さを一人嘆いてみる僕だが部員二人の部活に居場所を与えるという采配自体がよく取り消されないものだと思いつつ。カギ型をする校舎の隅から外に出ると主に文化系の居座る部室棟がありそのまた隅に我らが文芸部。日陰者とはよく言うなど日当たりを見て嘆息し中に入る。先輩談ではその方が本の管理には良いらしいがそれが本気なのか強がっているのかは想像に任されている。あの先輩なら本気で言っている可能性が高い。

部室には先輩がいて相変わらずキノコでも体から生えてくるんじゃないかとこちらに思わせるくらいじめじめしている。先輩が本のためにクローゼットに入れるようなタイプの湿気取りをこれでもかと配置しているので空気はからからである。先輩本人からくるこのじめじめは周囲から学校内カースト最底辺どころか明らかに別次元の扱いをされている僕らのような人間にしか出せないものである。

先輩は本ではなくて何十枚かある紙べらをめくって読んでるのでおそらく僕の昨日提出した小説だろうとあたりをつけひよいと覗き込んでみるとその通りだったので幾分気恥ずかしさを覚えながら鞆を置き僕の定位置に座る。

部活で年二回発行する部誌のため原稿を書くことがこの部活唯一のしきりである。去年書いたものを読み返して自分で自分を殴りたくなつたので今年はそうならないようにと思つて書いてはみたものの先輩に目の前で読まれるとタイムスリップでもして書いていたときの自分を殴りたくなる。

読み終わったのか目を閉じ今一度原稿をめくり始める先輩は本を読むときの癖で文字世界内に没入しておそらく僕の来襲に気付いていないと思われるのでこちらから声をかける。

「どうでした？」

先輩の目線はどう考えても声のしていない入り口のドアを一瞬ぱつと漂つた後天井をぐうんと通過し最終的に僕の元へと落ち着いた。

「ああ、いたのか」落ち着いた声であり、先輩は見た目はともかくこのボイスを持ち合わせたことによりどこかの部活から誘われているらしいと一週間前本人から聞いた。

「いました」こちらの声は若干高く滑稽である。

先輩からの一言批評。

「君は身を削つて小説を書いているね」

褒め言葉だと、受け取つた。

(続く)



ファイリオトウーラ

ぺたへるつ

もうすぐ春だね——とエミが言った。

まだだよ——と私は答えた。

\* \*

パパは私の成人式の前日に死んだ。実をいうと、それで私はパパに感謝していたりする。なぜなら、そのおかげで成人式が延期になったからだ。ほんの七日だけだったけど、その七日間、私とエミは大人にならずにすんだ。

だから、私はパパに感謝している。

話したことも、会ったことも、見たことしかなくて、私の誕生日すら知らないパパだけれど、最後の最後に時間をくれた。

奇跡のような七日間。

世界中が深い悲しみの色に覆われている中で、きつと私だけが幸福だった。

でも、それは永遠じゃない。結局のところ一六八時間という有限な時間に過ぎなくて、一〇〇八〇分という時間が巡り、六〇四八〇〇秒目の秒針が動いた瞬間に終わりを告げてしまう。奇跡には限りがある。大切に、大切に使わなければならない。だから、私はその七日間を全て

エミと過ごすために使うと決めた。

そして、七日目。

その残り三五四二一秒目を、私は海の見える公園で迎えていた。もちろん、隣にはエミがいた。

「きれいな夕陽、カヲルも見てよ、ねえ」

「見てるって」

陽気なエミの瞳に、夕陽の赤が映り込んでいる。その透き通るような大きな瞳、長いまつげ、形の良い鼻、柔らかな唇、顎から喉にかけての滑らかなライン——その横顔に見とれつつも、私はそっけなく応える。

「ただの夕陽じゃない」

「でも、きれいな夕陽だよ」

「……夕陽、好き？」

「うん、好き」

「そう」

冷たい風が吹いて、エミの長い髪がなびく。彼女の甘く優しい薫りが、私の鼻孔にふわり届けられる。それは、一七歳の春に吹く風。でも、その中にはまだ一六歳の冬が隠れている。エミの匂いも、まだ一六歳のままだ。



(  
続  
)



フ  
レ  
ー  
ム  
・  
イ  
ズ  
・  
デ  
ッ  
ド

菱野隆弘

世界を覆っていた暗闇は終焉を告げた。

これより第四階梯に移行します。

私は私の世界である——ワイトゲンシュタイン

僕の世界の限界が減びゆくその時、君はそばにいてくれるかい？ そう僕が尋ねたのは中学二年生の夏で、蟬があまりに煩く鳴いていた。音が多重に聞こえゆくその景色を僕は見ていた。相手の影が見えなかった。あの時、彼女は本当にそこに居たのだろうか。霧のように溶けやすい思い出は、いつも形を変えてゆく。時間の矢と共に的外れに命中する。彼女は記憶だ。幾つもの集中線が僕と彼女を貫いていた。輪郭はまだ見えない。太陽光の焦点がずれているようにも感じられた。壁気楼のように彼女は揺れている。存在ごと不確かで、でも真摯だった。核は持っていた……ような。何もかもが曖昧に過ぎてゆく。夏だった。

いつもそこで目が覚める。わけのわからない、でも僕にとって大切であることは、心に棘となつて突き刺さつ

ていた。僕は……あの夏。

「おにーちゃん。ご飯だよー」

僕の深まりゆく回想は妹の声で遮られた。若干の疎ましさを含むその音はしかし馴染みのもので、この世にまだ僕が繋ぎとめられていることを再確認させられる。

「今行くよ……今行く」

布団の端が捲れている。そこから這い出してくしゃくしゃに縮こんだシーツをもう一度畳み直す。今日の夜、再びここに戻つて来られるように。窓からはカーテン越しでも感じられる日光が室内を照りつけ、全ての回転を鈍くしていた。

（暑いな……）

階段を降りるにつれて覚めきつていなかった意識が強烈に揺り戻されていく。ここに。冷房の風が朝食の匂いを運んでくる。

リビングに着くと妹はすでに消化吸収を始めていた。つんと臭う消化液を避けつつテレビの横にある両親の位牌まで辿り着く。

（今日も世界は始まりました。今日も昨日と何も変わつ

ていないようです)

世界の監視者として職務を遂行していた両親は一年前に死んだ。死んだと言うと語弊がある。存在レベルが一段階上がった。死んだことと、この世界から見れば変わりはない。妹はその時から異次元と混濁している。

席についた僕は処刑前夜のような絡繰に掴まれていた。

(食べよう……)

妹の作つた時間を嘸み締めるに従つて、削れていく僕の存在。さらさらと砂時計の中身のように落ち続ける感覚。もう慣れた。

「おにーちゃん。今日も帰りは遅いの？ 晩御飯いる？」

「今日も遅い。晩御飯はいる」

素っ気ない返事にもなる。妹と僕は半壊している。妹から見ればワックスかけたてのフロアリングかもしれないが、僕から見ればここはただの廃墟だ。

天井から天上が零れ落ちてくる。一部が妹と混ざり合っている。一部は朝食に紛れ込む。崩壊した空を見上げる。カタカタカタカタ……。空の切れ端が穴とぶつかり音を立てている。

(続く)



五日目の文芸部（試し読み版）

やおいやおい

ある日、何か読むものを求めて本棚を眺めていると、Y先輩が来て、辞書の一冊を手についた。

「これが何かわかるかい」

「広辞苑ですね」

「そう、エロい単語をピンクに染めるための書物だ」

「毎年部費で、部員の数だけ広辞苑を買っている」

「人数分ですか」

「三千ページある。毎日三ページ、全ての項目に目を通し、エロい単語に線を引き、そこにある言葉で作文する。」

先輩から代々受け継がれた、秘密の特訓だ」

「三千ページじゃ、三年間かかりますね」

「高校生活三年間で、きつと語彙が増える。」

「それでもまだ小学生みたいな下ネタですか？」

「それもまた言葉を選んだ結果だよ」

「君は部員じゃないから、部費で広辞苑を買えない」

「だから、私が広辞苑をあげよう」

「これ、かなり高いんじゃないですか？」

「気にするな、私の買って貰った広辞苑だ」

「……え？」

「大丈夫」

「これ、真つサラじゃないですか」

「大丈夫、君が染め上げれば良い」

(続く)



ナマエとカラダ

フミコフミオ

「名は体をあらわす」というのなら体もまた名をあらわしていないければならない。俺はそう考えている。

結局のところ名と体は不可分なものだと俺なんか思うわけよ。むしろ森羅万象、万物とまではいかなくとも、この世の大概のものは、その外見、味、匂いという外的な見え方を捉えた人間によつて名前を付けられているわけだから、本来ならば、名前ではなく体の方が主でなければならぬ……とさえ思う。

そんなことを考えている俺の名前はコピーロボット。あだ名らしいあだ名だろ？ コピー、はっ、複写だぜ。

俺そのものを何もあわらしていない俺のあだ名を俺は気に入っている。何も表していない、示していない、属していない、who? そういう自由な気楽さを俺は愛してつてわけだ。

俺がコピーロボットと呼ばれるようになったのは学生

時代。暴力の権化。湘南アトカリプス。北の暴れん坊將軍様。ミスターポルポト。ビーバップ太郎。そんな、この世に存在する暴力的なあだ名をすべて背負いまくったんじゃねえかと思しき悪名高き貝塚のバカに、ライターで赤く焼けるまであぶられたプラスチックライターを右、左、右、左の順番で鼻の穴に突っ込まれたおかげで鼻が赤く焼けてしまったからだ。

体は名をあらわす。ほい、パーマンのコピーロボット。いつちよ上がり。真夏の拷問であったのを感謝している。時季が時季なら真つ赤なおはなのトナカイさくんくはくと歌われていた可能性もあつたわけだからな。クソ。

(続く)

## 妄点 vol.7 (試し読み)

---

|       |  |
|-------|--|
| 発行日   | 2014年11月24日 第一刷発行  |
| 頒 価   | 50円  |
| 編 集   | 大文妄  |
| 発行所   | 太陽村第二収容所   |
| 公式サイト | <a href="http://www.bunmow.net">http://www.bunmow.net</a>    |
| 連絡先   | <a href="mailto:bunmow@hogefuga.net">bunmow@hogefuga.net</a> |

---